

イスラム看護指針およびムスリム患者対応能力アセスメント指標の作成

看護学研究科 丸 光恵

**キーワード** がん、思春期、若年成人期、小児慢性疾患、看護**研究概要**

イスラム教徒(以下ムスリム)は世界人口のおよそ4分の1を占めており、東アジアから西アフリカまでの広範な地域に居住しています。日本では2000年前後より、いわゆる外国人患者を対象とした「多文化看護・医療」への関心が高まり、問診票や院内標識の多言語化などが推進されてきたものの、特に宗教への配慮を含んだ看護については事例報告や小規模な実態調査のみにとどまっています。そこで、イスラム教を切り口に、看護・医療専門職の宗教への配慮を含む多文化対応能力に資することを目的として、インドネシアおよびサウジアラビアにおけるフィールド調査、関西圏の基幹病院・センター病院の看護師らとの会議・セミナー開催、イスラム教国・非イスラム教国の専門職を対象としたグローバルウェブアンケートを行い、医療を必要とするムスリムにはどのような配慮が必要かを明らかにしました。ムスリムへの配慮は同じイスラム教といっても国籍・人種・宗派等、多様な要因に影響を受けており、イスラム教に関する基本的な知識は必要であるものの、ステレオタイプな先入観は誤った対応を導く可能性があることが示唆されました。このような多角的な調査結果をもとに、イスラム看護師審及びムスリム患者対応能力アセスメント指標を作成しました。

アピールポイント

外国人患者の問題は長らく言語の壁の問題と捉えられてきましたが、医療通訳の導入などにより第二段階に入っています。多様な文化的背景をもつ患者に対して、納得して医療を受けていただくための指針と多文化対応能力の自己診断ツールは、多文化教育に広く活用できるものです。

応用分野

イスラム教徒は若年人口が多くを占めており、外国人高度人材や留学生等、子育て世代の長期滞在者が増加する可能性を持ちます。今後は看護・医療にとどまらず、幼児教育、社会福祉サービス分野における多文化対応力強化に関する展開を検討し、健やかな子育てを支える多文化共生社会に貢献したいと考えています。